

平成26年度 郷土館移動展 **標茶に残る**

レコードの世界

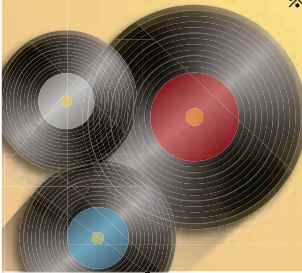
郷土館には、一般の家庭で親しまれたレコード盤や蓄音機が、数多く寄贈されています。郷土館で保管されているレコード盤は、戦前のSP盤から1970年代のLP盤まで幅広い時代のレコード盤があり、総数は250枚ほどを数えます。

今回の移動展では郷土館所蔵の各種のレコード盤を展示します。また合わせてレコードの歴史と共に蓄音機を紹介します。どうぞ懐かしいレコードの空間へお越しください。



開催日程 (各会場のロビーに展示します。見学は無料です。)

※各会場とも初日は、午後からの展示となります。



- 1月16日(金)～23日(金) 開発センター
- 1月26日(月)～30日(金) 磯分内公民館
- 2月2日(月)～6日(金) 虹別公民館
- 2月9日(月)～13日(金) 沼幌小学校
- 2月16日(月)～20日(金) 久著呂中央小中学校
- 2月20日(金)～27日(金) 標茶町図書館

大川のほとり
 —郷土館だより(第64号)—
 ☎487-2332
 開館時間
 午前9時30分～午後4時30分

郷土館より上
 一筆啓上

新年が始まりました。
 今年は標茶町の行政施行130周年であり、標茶町郷土館も開館から45年の節目でもあります。
 便利で気軽に利用できる郷土館を目標に、さらに事業展開します。どうぞご利用ください。(坪)

オトギリソウ

オトギリソウ

—ウシの光線過敏症の原因となる植物—

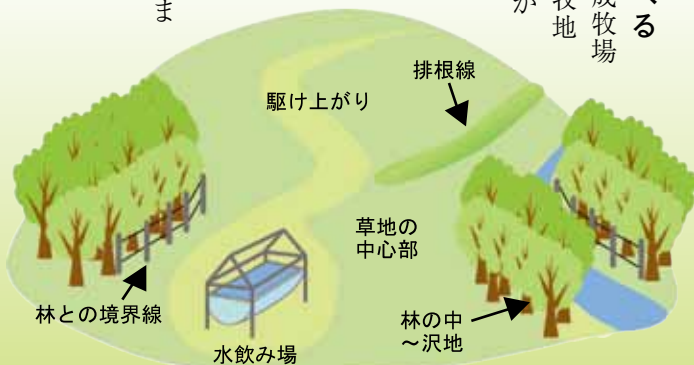
オトギリソウは夏に黄色の花をつける、高さ20〜60センチほどの植物です。葉が2枚ずつ十字に交差するように生え、葉にはたくさんの黒い点があります。昔、鷹匠の兄弟がいて、この草が葉草であるという秘密を明かしてしまった弟を、兄が怒って切り殺した言い伝えから「弟切草」の名前があり、葉にある黒い点はその時の血痕なのだそうです。

この植物は昨年の広報しべちゃ1月号で紹介したウシの病気「光線過敏症」の原因の1つです。原因となる植物はほかにもありますが、まずはこの植物について、郷土館の調査で分かってきたことをご紹介します。

◇放牧地のオトギリソウの分布を調べる

2013年の6月と8月に本町の育成牧場にて、過去に光線過敏症が発生した放牧地を歩いて、オトギリソウが生えているかどうか調べてみました。

放牧地と一言でいっても、さまざまな場所があったので「林との境界線」「林の中〜沢地」「駆け上がり」といわれるウシが通る斜面「排根線」といわれる草地を作るときに木の根などを土手状に積み上げた場所、「水飲み場」「草地の中心部」に分けました。オトギリソウを見つけたら地図に落とし、そのあと引き抜きました。



植物の名前で十二支に挑戦!



エゾベニヒツジグサ (撮影地：塘路湖)

植物の名前で十二支を作れないかと調べてみました。「ネズミガヤ (鼠茅)」「ウシハコベ (牛繁縷)」「オカトラノオ (岡虎尾)」「エゾウサギギク (蝦夷兎菊)」「ギンリョウソウ (銀竜草)」「ヒメヘビイチゴ (姫蛇莓)」「ムラサキウマゴヤシ (紫馬肥)」「エゾベニヒツジグサ (蝦夷紅未草)」「エンコウソウ (猿猴草)」「エゾトリカブト (蝦夷烏兜)」「イヌタデ (犬蓼)」「エゾノシシウド (蝦夷猪独活)」

ほかにも、「サルナシ (猿梨、コクワともいいます)」よくネコジャラシと呼ばれている「エノコログサ (狗尾草、イヌのしっぽという意味)」など、十二支に出てくる動物の名前が入った植物はまだありますので、探してみると面白いですよ。

『標茶町郷土館報告』

第26号

無料配布中

本町の歴史や自然に関する報告と、郷土館の活動年報告を収録した『標茶町郷土館報告』第26号を無料配布しています。

今号は横平弘氏による『標茶町も「観光立町」を目指そう』や高嶋八千代氏 (共著) による『アイヌ民族が食した植物についての一考察』などのほか、本町在住の昆虫研究者である飯島一雄氏の『標茶町から採れたカブトムシ』など、多様な報告を掲載。

希望する方は郷土館まで連絡してください。

◇結果



林に面した牧柵の外側でよく見わかりました

所でよく見わかりました。また6月に抜き取っても、同じ場所に8月も生えていました。

◇結果から見えてくること



ウシが通る斜面でもよく見わかりました

(攪乱地)を好むことがわかります。

また6月に抜き取っても8月に同じ場所で生えていたので、駆除するには初夏〜夏にかけて何回か行う必要があります。野草園を管理している方のお話では、オトギリソウはタネをまくと発芽率が大変良いそうです。この話からタネができる秋までに、できるだけ抜き取ったほうがいいことも見えてきます。

◇郷土館が出来ること

光線過敏症の発症には、ウシそれぞれの体調や体質、食べた有毒植物の量、植物の成長段階、その年の天候などさまざまな要因にも左右されるので、原因を絞り込むのは難しい面がありますが、今回のような調査結果をもとにして、原因となる有毒植物にウシを近づけさせない対策を立てれば、発症するリスクを下げることもできるかもしれません。